

# 教師の適應に關する豫備的研究

特に中學校教師の悩みについて

小 川 一 夫

教育の方法は教師中心から児童・生徒中心のあり方に變り、教育の目的は児童・生徒の知的發達のみならず、社會的・情緒的發達や身體的發達などを廣く包括した全人的發達を追求するにいたつた。しかも

教育の過程は、その大部分が教師と児童・生徒との間に展開される力動的な相互關係の連続であるが故に、教師の全人格的資質が教授上必要な知識や技術と共に重視されねばならない。教師の精神的健康の如何は児童・生徒の學習の活動の面のみならず、かれらの態度や人格形成に深い相即的な關係をもつてゐる。

## 一、調査の目的

教師はいかなる點に自己の悩みをもつてゐるか。又これら不當適應の様相ないし可能性は、地域や性別や年齢や職別により特殊な傾向をもたないか。我々は以上の問題の解明を以て本調査の目的とした。教師の不當適應の原因に關する主要傾向が概観されるならば、教師の適應の機制を究明する基礎が得られる。従つて我々は、教師の適應に關する豫備的研究として教師自身の悩みの調査をとりあげた。

## 二、調査の手續き

### (1) 對象

島根縣下中學校教師一三八五名を對象とした。

### (2) 時期

昭和二十五年十一月調査を實施した。

### (3) 問題及び方法

一九四〇年にアメリカの國民教育協會 (The National Education Association) が調査した結果、教師の個人的な不當適應の主な原因としてあげられたものを参考にし、それを多少修正して次の問題を構成した。わが國の教師についても大體同様の原因が見出されると豫測されるからである。

現在あなたが最も氣にかけておられるのは次のどれですか。該當に○印をつけて下さい。なお心配のない場合印をつけないで下さい。

A 要求される仕事の過重

B 低賃金

C 職業的保證の不安定

- D 他人の仕事に常に負擔せしめられること
- E 學校外の活動における道徳的な嚴格な制限
- F 抑壓的專制的な管理者・監督者
- G 一般公的事業からの離反
- H 煩瑣なこまかい仕事に不斷に注意していなければならぬこと
- I 常に未熟な者と接觸していること
- J 校務處理の煩雜
- K 教育的信念に對する疑惑
- L その他( )

質問紙法による自由摘出法をとつたわけであるが、無記名とし、性別・年臺別のみを記入してもらつた。なお職別(校長か、一般教官か、の別)と地域別とは特別の操作で判明するようにしくんだ。

### 三、結果及びその考察

調査の目的に於て述べた如く、我々は教師の不當適應の原因に關する主要傾向の解明を意圖しているので、結果の考察にあつては、惱みの機制に格別ふれないこととした。

なお結果は性別・職別・地域別・年臺別に整理を試みた。ここに至る主要な結果の概要を記述すると次の通りである。

#### (1) 總體的考察

表 I 最後の列に示されるものが全體としての結果である。表の f は頻數を現わし、% は百分率であるが、調査の方法が自由摘出法であるため、% の算出は全員の何% が當該項目を摘出しているかを示すよう

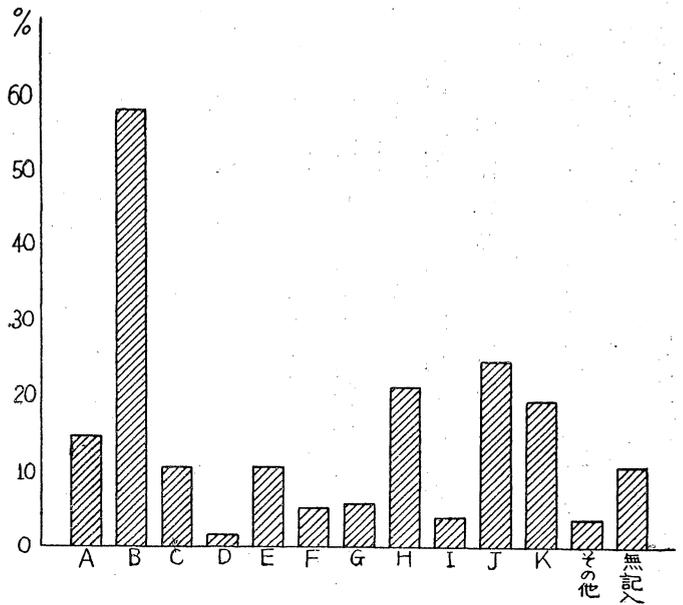
に調査人員(N)を基にした。即ち頻數(f)の合計(Σ)を基にした  $100 \times \frac{f_i}{\Sigma f}$  でなくして、 $100 \times \frac{f_i}{N}$  とした。(以下全てこれに準ずる) 教師の惱みとして比較的多く指摘されたものを見ると、B(低賃金)が壓倒的に多く五八・〇%を占め、教師の大半が經濟的な惱みを意識している。次いで比率はすつと低くなるが、J(校務處理の煩雜)の二四・八%、H(煩瑣なこまかい仕事に不斷に注意していなければならぬこと)の二一・〇%、K(教育的信念に對する疑惑)の一九・四%がみられる。

これに對し、列擧されることの比較的少いものは、D(他人の仕事に常に負擔せしめられること)の一・七%が最低であり、I(常に未熟なものと接觸していること)の四・一%、F(抑壓的專制的な管理者・監督者)の五・〇%、G(一般公的事業からの離反)の五・八%などがこれに續いている。

表 I 總員及び性別頻數表

項目	男 N=1,107		女 N=278		計(總員) N=1,385	
	f	%	f	%	f	%
A	168	15.2	32	11.5	200	14.4
B	702	63.4	101	36.3	803	58.0
C	125	11.3	19	6.8	144	10.4
D	17	1.5	7	2.5	24	1.7
E	116	10.5	26	9.4	142	10.3
F	57	5.1	12	4.3	69	5.0
G	69	6.2	11	4.0	80	5.8
H	222	20.1	69	24.8	291	21.0
I	50	4.5	7	2.5	57	4.1
J	276	24.9	67	24.1	343	24.8
K	194	17.5	74	26.6	268	19.4
その他	39	3.5	9	3.2	48	3.5
無記入	94	8.5	48	17.3	142	10.3

圖 I 總員の比率圖



質問に列挙した項目以外に摘出すべき問題があれば、具體的に記述するように、その他の項目を設けたのであるが、其の他の項をとりあげた者は僅かに全員の三・五%の低率であり、格別具體的な問題も記されていないので、一應その他としてそのままとめておいた。

次に設問の要求通り解釋するには少々無理があるが、現在特別の心配を持たぬと一應解されるもの、即ち無記入者は全體の約一割(一〇・三%)にあたり、これによつても現在の中學校教師の殆んどが何らかの個人的な悩みをもつことをうかがうる。

(2) 男女別考察

性別の結果は、表 I 及び圖 II に示す如く、男教師に於て最も多いのが B の六三・四%であり、次いで J の二四・九%、H の二〇・一%、K の一七・五%の順となつてゐる。女教師にあつては B が最高で三六・三%、次いで K の二六・六%、H の二四・八%、J の二四・一%の順で、共に B が最も多く、次いで J・H・K が主要なものであることは變りがないが、J 及び K に於ては性別間に順位の違いがあることが判る。今これらの主要な項目のうち、J は明らかに性別の差は認められないので、他の項目 B・H 及び K について  $\chi^2$  檢定により男女間に於ける差の有意性の檢定を試みると次の如くなる。

B.....0.01 > P( $\chi^2 \cong 68.27$ )       $df=1$     ++

H.....0.20 > P( $\chi^2 \cong 1.93$ ) > 0.10       $df=1$

K.....0.01 > P( $\chi^2 \cong 7.58$ )       $df=1$     ++

※  $df$ .....自由度

++++.....危険率 1% で有意

+.....危険率 5% で有意

即ち B 及び K の項目に於ては、夫々一%の危険率で男女間に有意の差が認められる。従つて B では男教師の方が女教師より大であり、K では反對に女教師の方が男教師より大と言える。

以上考察した以外の、列挙されることの比較的少い項目に於ては、性別の差異はあまり著しくない。ただ A 及び C に於てやや男教師の比率が高いようであるが、檢定の結果は

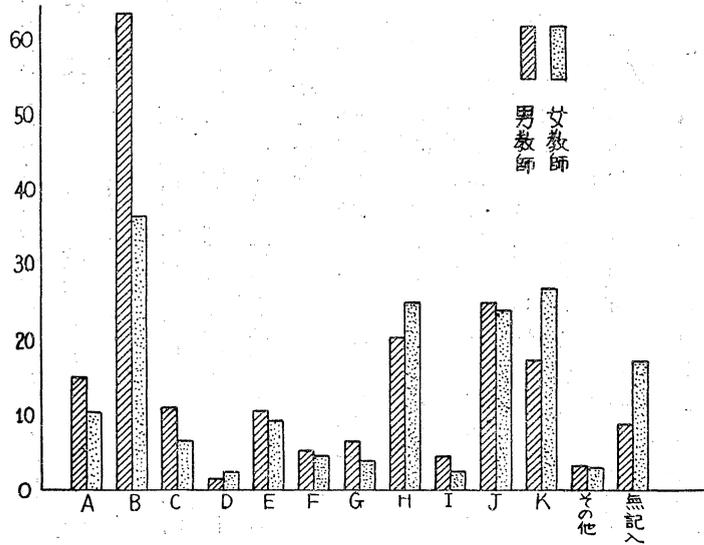
A.....0.20 > P( $\chi^2 \cong 1.84$ ) > 0.10       $df=1$

C.....0.05 > P( $\chi^2 \cong 3.94$ ) > 0.02       $df=1$     +

(3) 職別考察

となり、Cにあつては五%の危険率でもつて男教師の方が大と認められる。  
 無記入の、一應何らの心配もないと解される者に於ては、  
 無記入…… $0.01 > P\{X^2 \leq 15.55\}$   $df=1$  十十  
 となり、一%の有意水準で女教師の方が大である。従つて悩みを意識しない者は女教師の方に多いと認められる。

圖 II 性別の比率圖



となり、Cにあつては五%の危険率でもつて男教師の方が大と認められる。

無記入の、一應何らの心配もないと解される者に於ては、

無記入…… $0.01 > P\{X^2 \leq 15.55\}$   $df=1$  十十

となり、一%の有意水準で女教師の方が大である。従つて悩みを意識し

ない者は女教師の方に多いと認められる。

(3) 職別考察

次に我々は、中學校教師を校長、一般男教師、一般女教師の職別に区分して結果の検討を試みたい。職別と言つても、校長は全て男子であるために、先の性別考察の場合の女教師が、そのまま職別考察の一般女教師に該当する。

職別に整理された結果は表IIに掲げる如くであるが、指摘された悩みの多少の順位の上で、職別相互の間に二位以上のずれの認められるものを一應列挙すると、C(五・六一七)、G(一〇・五八・五・一九)・I(七・一〇・一〇・五)、J(二・二・二・四)及びK(八・五・三・二)である。(數字は校長—一般男—一般女の夫々の順位を示す)而してこれらの中、G・I・Kの項目は校長と一般教師との間のずれであり、Cは校長と一般女教師の間のずれであり、Jは校長及び一般男教師と一般女教師との間のずれであることが認められる。

以上の順位上ずれの大きい項目を参考にし、それ以外の項目の中でも、比率上可成りのずれが職別相互の間に認められるものを選んで差の有意性の検定を試みた。その結果

A…… $0.20 > P\{X^2 \leq 3.62\} > 0.10$   $df=2$

B…… $0.01 > P\{X^2 \leq 20.29\}$   $df=2$  十十

C…… $0.20 > P\{X^2 \leq 4.57\} > 0.10$   $df=2$

H…… $0.05 > P\{X^2 \leq 6.49\} > 0.02$   $df=2$  十

J…… $0.05 > P\{X^2 \leq 6.49\} > 0.02$   $df=2$  十

K…… $0.01 > P\{X^2 \leq 17.14\}$   $df=2$  十十

無記入…… $0.01 > P\{X^2 \leq 14.57\}$   $df=2$  十十

となり、五%以下の危険率で一應職別相互の間に一定の傾向が認めら

れるものは、B・H・J・K及び無記入の項であることが判つた。これらの項目に於ける校長、一般男教師、一般女教師夫々の間の差異については、厳密には信頼限界を求める必要があるが、便宜上比率から推察して次の事が結論づけられるであらう。

即ちBに於ては、一般女教師の悩みが校長及び一般男教師に比べて少いことが言える。然しこの傾向は既に性別の考察で検討された結果と同じである。Hに於ては、一般男教師の指摘が校長及び一般女教師に比較して少い。Jでは、一般男女教師より以上に校長が悩んでいることが判る。又Kにあつては、校長よりも一般男教師、一般女教師よりも一般女教師がより疑惑をいだいていると言えよう。

最後に無記入の項についてであるが、悩みを持たない者は、校長や一般男教師に比べて一般女教師のより多いことが推察される。然し此の傾向はBの項目と同じく、既に男女別の考察に於て認められた事をくりかえしたにすぎない。

表 II 職別頻數表

項目	校長 N=131		一般男教師 N=976		一般女教師 N=278	
	f	%	f	%	f	%
A	26	19.8	142	14.5	32	11.5
B	76	58.0	626	64.1	101	36.3
C	18	13.7	107	11.0	19	6.8
D	4	3.1	13	1.3	7	2.5
E	11	8.4	105	10.8	26	9.4
F	8	6.1	49	5.0	12	4.3
G	4	3.1	65	6.7	11	4.0
H	38	29.0	184	18.9	69	24.8
I	10	7.6	40	4.1	7	2.5
J	50	38.2	226	23.2	67	24.1
K	8	6.1	186	19.1	74	26.6
その他	10	7.6	29	3.0	9	3.2
無記入	9	6.9	85	8.7	48	17.3

従つて職別として特に考察されることは、Hに於て一般男教師の悩みが小さいことと、Jに於て校長の指摘が多いことと、更にKについて疑惑を訴えるのは一般女教師が最も多く、次いで一般男教師、最も少いのが校長であるといふことの三つである。

(4) 地域別考察

地域別の考察にあつては、本縣の地域的特性より考えて、松江、濱田、出雲の三市を市部として一括し、隱岐地區を島部としてまとめ、その他の町村を寄せて町村部とした。

これら三つの地域別に整理された結果は、表Ⅲ及び圖Ⅲに示す如くである。あげられた悩みの多少の順位の上で、地域別相互の間に二位以上のずれの認められるものは、A(四一五・五)、E(一〇一七・四)、I(九一〇・五)、J(二二一・六)、及びK(五二四・三)の五項目である。(数字は市・町村・島の夫々の順位を示す)而してこれらの中、A・I・Jの三項は島部と市及び町村部との間のずれであり、Eは三地域夫々の間のずれであり、Kは市部と島部との間のずれであることが認められる。かくの如く市部と町村部の間のずれよりも、島部と他地域との間のずれが多いことからして、島部の特殊性の存在を推察することが出来る。

以上の順位上ずれの大きい項目を参考にし、それ以外の項目の中でも比率上、可成りのずれが地域別相互の間に認められるものを選んで差の有意性の検定を試みた。その結果

$$A \cdots \cdots 0.02 > P(X^2 \cong 8.96) > 0.01 \quad df=2 +$$

$$B \cdots \cdots 0.05 > P(X^2 \cong 5.99) > 0.02 \quad df=2 +$$

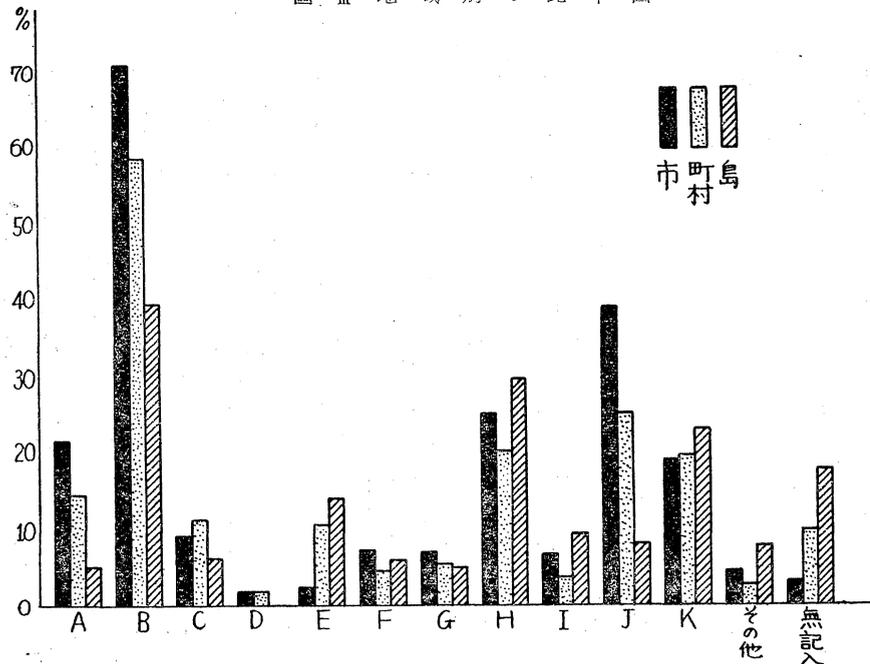
E..... $0.05 > P\{X^2 \leq 7.22\} > 0.02$   $df=2$  +  
 H..... $0.20 > P\{X^2 \leq 3.83\} > 0.10$   $df=2$   
 J..... $0.01 > P\{X^2 \leq 16.51\}$   $df=2$  + +  
 K..... $0.80 > P\{X^2 \leq 0.59\} > 0.70$   $df=2$   
 無記入..... $0.01 > P\{X^2 \leq 9.48\}$   $df=2$  + +  
 となり、五%以下の危険率で一應地域別相互の間に一定の傾向が認められるものは、A・B・E・J及び無記入の項であることが判つた。  
 市、町村、島の三地域相互の間の差異について、比率から次のことが結論的に推定されるであろう。

表 III 地域別頻数表

項目	市 N=111		町村 N=1,175		島 N=99	
	f	%	f	%	f	%
A	24	21.6	171	14.6	5	5.1
B	78	70.3	686	58.4	39	39.4
C	10	9.0	128	10.9	6	6.1
D	2	1.8	22	1.9	—	—
E	3	2.7	125	10.6	14	14.1
F	8	7.2	55	4.7	6	6.1
G	8	7.2	67	5.7	5	5.1
H	28	25.2	234	19.9	29	29.3
I	7	6.3	41	3.5	9	9.1
J	43	38.7	292	24.9	8	8.1
K	21	18.9	224	19.1	23	23.2
その他	5	4.5	35	3.0	8	8.1
無記入	4	3.6	120	10.2	18	18.2

即ちAに於ては、島部よりも町村部が、更に町村部よりも市部が高率であると言える。特に島部は他地域に比べて低いのが目立っている。Bに於ても同様に、島部よりも町村部、町村部よりも市部の方が教師の悩みが大きいようである。次いでEに於ては、逆に市部が他地域に比べて低く、校外での道徳的制限に關する悩みは、市部では殆んど問題にならぬことが判る。更にJに於ては、AやBと同じく島部よりも町

圖 III 地域別の比率圖



村部、町村部よりも市部の方が高率で、特に他地域に比較して島部の低率が顯著である。最後に無記入の項に於ては、市部よりも町村部、町村部よりも島部の方が高い。特に市部が低率であることは目立ち、現

在自己の悩みを意識しない教師は殆んどいないことを物語っている。

以上我々は地域別の考察をなしたが、教師の悩みの問題に關する地域別特性は、かなり多くのものが見出された。就中隱岐島の特殊性は注目にあたらしいよう。

### (5) 地域別・男女別考察

次いで我々は、地域別に整理した結果を更に性別に細分して、地域別・男女別考察を試みたい。既に述べた地域別又は男女別考察に於て、差のあるものと認められたA・B・C・E・J・K及び無記入の諸項目について、表IVに基づき検討を加えてみよう。先ずAに於ては、地域別考察で卍∨卍卍∨卍と推察されたが、男女両性夫々の地域別に於ても同じ傾向が見られる。即ち男教師に於ても卍∨卍卍∨卍であり、女教師にあつても卍∨卍卍∨卍と言える。特に市部女子の%が高いことと、島部女子の皆無とが注意をひく。Bに於ては、地域別考察で卍∨卍卍∨卍が、性別考察で卍∨卍がみとめられたが、地域別・男女別でも両性夫々卍∨卍卍∨卍がうかがえる。而して男女性別間のずれは卍∨卍卍∨卍となつてゐる。Cに於ては、性別の考察で卍∨卍が言われたが、此の性別間の差異は卍∨卍卍∨卍であることが判る。然し市及び島部の女教師は頻数の少い關係であまり明確には判定出來ない。Eに於ては、地域別の考察で卍∨卍卍∨卍と推察されたが、島の男教師が比較的高いようである。JはA・Bと同じく地域別考察で卍∨卍卍∨卍と判つたが、男女両性共夫々此の傾向がみられるようである。更にKは、性別考察に於て卍∨卍と推定されたが、性別間のずれは卍∨卍卍∨卍であることが考察される。最後に無記入であるが、性

別の考察に於ては卍∨卍が、地域別考察に於ては卍∨卍∨卍がみられたが、男女兩教師に於て夫々卍∨卍∨卍が言えるようである。

表 IV 地域別男女別頻數表

項目	市		町 村				島					
	男 N=90		女 N=21		男 N=936		女 N=239		男 N=81		女 N=18	
	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%
A	17	18.9	7	33.3	146	15.6	25	10.5	5	6.2	—	—
B	66	73.3	12	57.1	600	64.1	86	36.0	36	44.4	3	16.7
C	9	10.0	1	4.8	111	11.9	17	7.1	5	6.2	1	5.6
D	1	1.1	1	4.8	16	1.7	6	2.5	—	—	—	—
E	2	2.2	1	4.8	102	10.9	23	9.6	12	14.8	2	11.1
F	6	6.7	2	9.5	46	4.9	9	3.8	5	6.2	1	5.6
G	3	3.3	5	23.8	62	6.6	5	2.1	4	4.9	1	5.6
H	22	24.4	6	23.6	178	19.0	56	23.4	22	27.2	7	38.9
I	5	5.6	2	9.5	37	4.0	4	1.7	8	9.9	1	5.6
J	34	37.8	9	42.9	234	25.0	58	24.3	8	9.9	—	—
K	15	16.7	6	28.6	161	17.2	63	26.4	18	22.2	5	27.8
その他	4	4.4	1	4.8	28	3.0	7	2.9	7	8.6	1	5.6
無記入	2	2.2	2	9.5	79	8.4	41	17.2	13	16.1	5	27.8

### (6) 年臺別考察

次に被調査者の年齢を一〇歳臺・二〇歳臺・三〇歳臺・四〇歳臺・五〇歳臺に區分して整理すると、表Vの如き結果が得られた。既に諸観点から加えた検討の結果、主要なものと思われるA・B・C・E・H・J・K及び無記入の諸項目について、ここで更に年臺別の観点から考察を加えてみたい。表に於て判る如く一〇歳臺及び五〇歳臺は頻數が極めて少いので、一應二〇歳臺以下、三〇歳臺、及び四〇歳臺以

表 V 年臺別頻數表

項目	10歳臺 N=16		20歳臺 N=649		30歳臺 N=358		40歳臺 N=299		50歳臺 N=41		不明 N=22	
	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%
A	2	12.5	81	12.5	56	15.6	51	17.1	8	19.5	2	9.1
B	5	31.3	376	57.9	221	61.7	163	56.2	17	41.5	16	72.7
C	1	6.3	55	8.5	36	10.1	41	13.7	10	24.4	1	4.5
D	—	—	11	1.7	3	0.8	9	3.0	1	2.4	—	—
E	2	12.5	93	14.3	23	6.4	22	7.4	1	2.4	1	4.5
F	—	—	32	4.9	17	4.7	15	5.0	4	9.8	1	4.5
G	1	6.3	46	7.1	15	4.2	16	5.4	2	4.9	—	—
H	5	31.3	117	18.0	81	22.6	72	24.1	7	17.1	9	40.9
I	1	6.3	17	2.6	16	4.5	17	5.7	5	12.2	1	4.5
J	2	12.5	127	19.6	106	29.6	93	31.1	10	24.4	5	22.7
K	5	31.3	160	24.7	51	14.2	44	14.7	2	4.9	6	27.3
その他	—	—	16	2.5	14	3.9	14	4.7	4	9.8	—	—
無記入	5	31.3	73	11.3	26	7.3	30	10.0	5	12.2	3	13.6

上に區分を改めて、 $\chi^2$  検定を行った結果  
 A……0.20 >  $P\{\chi^2 \leq 3.42\}$  > 0.10  $df=2$   
 B……推定により有意差なし  
 C……0.02 >  $P\{\chi^2 \leq 8.14\}$  > 0.01  $df=2$  +  
 E……0.01 >  $P\{\chi^2 \leq 17.53\}$   $df=2$  ++  
 H……0.30 >  $P\{\chi^2 \leq 2.81\}$  > 0.20  $df=2$   
 J……0.01 >  $P\{\chi^2 \leq 12.18\}$   $df=2$  ++  
 K……0.01 >  $P\{\chi^2 \leq 17.66\}$   $df=2$  ++  
 無記入…推定により有意差なし

となり、五%以下の危険率で一應年臺別相互間に一定の傾向が認められるものは、C・E・J及びKの四項目であることが判る。従つて二〇歳臺以下、三〇歳臺、四〇歳臺以上の三つの年臺相互の差異について、比率から次のことが結論として推定されるであろう。

即ちCに於ては、二〇歳臺以下よりも三〇歳臺が、更に三〇歳臺よりも四〇歳臺以上が多く指摘すると言へる。次いでEの項に於ては、三〇歳臺以上(四〇歳臺以上を含む)よりも二〇歳臺以下の教師が大きい悩みを意識している。更にJに關しては、逆に二〇歳臺以下に比べて三〇歳臺以上が高率であることが判る。最後にKについてであるが、この項目に於ては、Eと同じく三〇歳臺以上よりも二〇歳臺以下の方が強く疑惑を感じているようである。

(7) 年臺別・男女別考察

先の年臺別の考察に於て推定された如く、C・E・J及びKの項目について、年臺別差異を我々は認めたのであるが、更にその年臺別に整理された結果を性別に細分して考察を加えておきたい。(表は省略する)

先ずCの項目に於ては、年臺別の考察の結果、20歳臺以下 < 30歳臺 < 40歳臺 < 50歳臺が認められたが、女教師にあつては、30歳臺 < 40歳臺 < 50歳臺であることが判る。(男教師は30 < 40 < 50) 又性別の考察に於てみとめられた油 < 油の關係は、三〇歳臺以下には妥當するが四〇歳臺以上にあつては認められない。次にKについては、すでに性別の處で述べた如く油 < 油であつたが、此の傾向は各年臺に亘つて言へるようである。同様に性別間の差異の既に認められたBに於ても、油 < 油

の關係は各年臺に亘つて存在することが認められる。

#### 四、概 括

中學校教師の悩みに關する調査の結果、教師の訴えた苦惱の最大のものは低賃金であり、大半の教師がこれを擧げた。次いで主要なものは、校務處理の煩雜であること、細かい多くのことに注意を要すること、教育的信念に疑惑を感ずることであり、これらは教師の約 $\frac{4}{5}$ 乃至 $\frac{5}{6}$ が感じてゐるようである。我々はかかる教師の苦惱を、更に性別・職別・地域別・年臺別に亘つて詳細に考察し來つたのであるが、最後にそれらをまとめる意味で、主要な項目別に考察を加えることにする。

##### (1) 仕事の過重な負擔

教師の不當適應の主要原因と思われる前記の四つの項目に次ぐもので、教師の約一五%がこれをあげた。中學校教師の仕事のもつ精神的負擔は、負擔の過重より寧ろ細かい多くの事への注意とか、校務處理の煩雜な點で大きいようである。此の仕事の過重な負擔については、男女別にも、職別にも、又年臺別にも、特別の傾向は認められないがただ地域別に於て、男女共に島部よりも町村部に、町村部より市部に、教師の悩みが多いことが言われる。市部で約二〇%、町村部で約一五%であるが、隱岐島では僅かに五%の低率で、殆んど問題にされていない。これと同じ傾向が後述の校務處理の煩雜さに關しても認められる。

##### (2) 低賃金

この項目は男女共に最も多くて、全員の約六〇%も指摘してゐる。

經濟的な悩みは、如何なる職業の人も大なり小なり持つてゐることは疑えないが、特に教師の經濟的な力の弱さは一般に認められるところである。特に性別では、男教師の悩みが女教師のそれより大きく、地域別では、兩性共に島部よりも町村部、町村部よりも市部が高率である。又兩性間のずれは、逆に市部より町村部、更に町村部より島部に到るほど大きいことがうかがえる。

##### (3) 身分保證の不安定

全體としてはさ程高い方ではなく、全員の約一〇%がこれを擧げた。ただ男教師の方が女教師よりも悩みの意識が強いこと、又この性別の差異は、島部より町村部、町村部よりは市部の方が大きいこと、更に年臺別では男教師は、二〇歳臺以下より三〇歳臺、三〇歳臺より四〇歳臺以上、女教師は三〇歳臺以下より四〇歳臺以上と、大體年齢の増す程悩みの度合が高まることが注目される。

##### (4) 校外の活動のきびしい制限

とかく教師の立場は、一般社會から嚴格な道德的規範をもつて律せられる傾向があつた。教師なるが故に強い社會的束縛を受けるのではないかと考えられたが、結果はさほど多く指摘されず、全員の約一〇%にすぎなかつた。性別にも職別にも差異は認められないが、地域別に於て、市部よりも町村部、町村部よりも島部が高率である。特に市部では殆んど問題にされていなくて約三%にすぎないのに、隱岐では約一四%（男教師は約一五%）であることは注意をひく。又年臺別では、三〇歳臺以上に比べて二〇歳臺以下の若い者の悩みの高いことが判る。

## (5) 細かい多くの仕事への注意

これは教師の不當適應の主要原因の一つに數えられるもので、全體の約二〇%がこの悩みを訴えている。たしかに教師の仕事はあまりにも多面的であり、且つ些細なことに不不斷の注意を必要とする。此の項目は性別にも地域別にも年臺別にも格別の差異は認められず、ただ職別に於て、校長と女教師とが一般男教師に比べ高率である。特に校長の如きは全員の約三〇%が此の苦惱を擧げている。

## (6) 校務處理の煩雜

前述の細かい多くの仕事への注意と共に、教師の大きな悩みの一つで、全體の約二五%が指摘している。性別では差異は認められないが、職別では、校長が一般男女教師より高率を示している。又地域別では男女兩性共に、島部より町村部・町村部より市部が大きく、市部では全員の約四〇%がこれを擧げているのに、隱岐では約八%にすぎない。先に述べた仕事の過重負擔と併せて、島部では仕事の悩みが極めて低率であるのに、市部では反對に極めて高いことは注目される。又年臺別にみれば、二〇歳臺以下よりも三〇歳臺以上の者の方が強く悩みを意識していることがうかがえる。

## (7) 教育的信念の疑惑

教師は常に理想と現實との矛盾に直面し、苦惱しつつ、なんらかの手段をもつてこれを解決して行かねばならぬ立場におかれている。ある意味で児童・生徒の現實と社會の理想とを結びつける使命を教師は荷っている。ところが社會の現實が極めて混沌としてゐる今日に於ては、この使命を持つ教師は幾多の矛盾を感じては自ら苦しみ、現實逃避さえ起つてくる。それに加えて、教師の仕事の内容は生活全般に亘つての知識と技術とを必要とするが故に、教師自ら教育的信念に疑惑

を感ずることは多いであろう。此の項目の全體としての結果は、教師の約二〇%がこれを訴え、不當適應の主要原因の一つと考えられる。特に男教師よりも女教師が高率を示し、校長よりも一般男教師、一般男教師よりも更に一般女教師の方が強く悩みを感じている。地域別には差異が認められないが、年臺別に於て、兩性共に三〇歳臺以上よりも二〇歳臺以下の若い教師が強く教育的信念に疑惑を覚え、苦惱していることがしれる。

## (8) 未熟な者との接觸

未熟な者と常に接觸しているという事は、教師の受けている環境的制約としての著しいものであるが、調査の結果は極めて低率で、僅かに約四%にすぎず、殆んど問題にされていない。これは調査の對象が中學校教師であるためで、小學校教師の場合であれば、指摘される率の上昇が考えられよう。

## (9) 苦惱のないと解されるもの

無記入者の全てが苦惱を意識していないとは言えないが、解答を素直に解釋してゆくことにすると、全體的にみて、悩みなしとする者は約一〇%で、性別にみて、男教師よりも女教師の方が多い。又地域別では、兩性共に市部より町村部、町村部より島部の方が悩みを持たぬ教師の多いことが知られる。

以上我々は中學校教師に實施した悩みの調査を、性別・職別・地域別・年臺別に夫々整理して、比較檢證的な考察を試みた。その結果概略ではあるが、教師の不當適應の原因の所在を分析的に把握することが出来た。今後ここに得られた教師の不當適應の原因に關する主要傾向を基礎にして、一層深く問題の追求に努め、教師の適應の機制を教育心理學的觀點から解明して行きたいと念じている。